

平成24年10月12日

南の風 18

南部ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

市大会が終わりました。男子は戸塚、女子は大正が優勝しました。両チームの皆様、そして西部連盟の皆さんおめでとうございます。今回、最終日にゲーム観戦ができませんでした。くわしいコメントは差し控えます。南部連盟のチームは、男子の六ッ川が準優勝、六浦南がベスト8、石川がベスト16、女子では、サンライズ、洋光台、並木がベスト8という好成績を収めました。関東予選（神奈川県大会）でのさらなる活躍を期待したいと思います。関東大会目指して頑張ってください。

さて大変うれしいニュースです。京都大学の山中伸弥教授のノーベル医学・生理学賞受賞が決まりました。日本、いや人類にとって素晴らしいことです。iPS細胞（人工多能性幹細胞）の開発。くわしいことは私などには到底わかりませんが、「いままで治せなかった病気が治るようになる」と聞いただけでも、ものすごいことだと感じています。しかしなお驚いたことは、その研究は、10回やって1回成功するかしないかというもの。また山中教授の研究を審査した方の話によると、「千に三つでも当たれば成功」と言っています。気の遠くなるような研究のようです。山中教授によれば、「もうやめてしまおう。」「これ以上続けることは不可能だ。」と思ったことは、枚挙にいとまがなかったそうです。

この話を聞いてレベルに天と地ほどの違いがあることは承知の上で、バスケットボールの指導と重ね合わせてみました。バスケットボールの一つのスキルを選手が習得（習得とはゲームの中で、できるようになってはじめてできたことになる。）するには、膨大な時間と忍耐が必要となります。チームとしての戦力とするためには、さらなる時間と忍耐が要求されます。結果が出ないと指導者は、疑心暗鬼になります。「なぜ選手はできないんだろう？」「この方法で良かったのか？」「教える順序は正しかったのか？」「もっと試合経験を積ませた方がよいのでは？」などです。ミニバスケットボールで考えた場合、1年から3年位がチームカアップのスパンとなります。但し、勝負は1年です。指導をしていて、うまくいったケースの方が少なかったのではないのでしょうか。「**失敗と書いて成長と読む。**」という言葉があります。我々指導者は、よかれと思って指導したことが戦力とならず、苦悩することが多いものです。しかし、選手の実態を踏まえ、基礎・基本を見失わず正しい努力を続けていけば、たとえ失敗したとしても確実に成長していけるのではないのでしょうか。（勝ち負けは別としても）

逆に成長を阻むものとして、「**妥協、限定、満足**」という言葉があります。「この位教えておけばいいだろう。」「この程度やればいいや。」「今年のチームの力はこんなものだろう。」「これで精いっぱいだ。これ以上は無理だ。」このように、指導者が妥協したり、自己限定したり、選手の実態をしっかり掴まずに満足したりすれば、確実に成長はストップします。組織やチームは上に立つ者（管理者、監督やコーチ）以上には伸びないといわれます。

何度も書きますが、バスケットボールはハビットなスポーツです。繰り返し繰り返し、スパイラルに忍耐強く練習を積み重ねていくことが、成長あるいは目標到達への道となります。

今後ミニバスケットボールの大会は、神奈川県関東予選、全国大会予選へと進んでいきます。正にこれからが正念場です。各チームの指導スタッフの皆様の研鑽と精進、選手の皆さんの活躍を期待しながら、この号を閉じることにします。